

新 入 職 員 紹 介

4月1日から新しく、医師1名、看護師5名、理学療法士2名、薬剤師1名、臨床検査技師1名が入職いたしました。

新入職員の中には、経験を積んだベテランもいれば、社会人1年生もいて、経験はさまざまです。

「患者様への笑顔や声掛けを忘れず、その身になって考え行動し、患者様が安心、笑顔になれるような素敵なスタッフになれるよう頑張ります。」



ご当地今昔物語 第6回 明石原人の話

直良信夫（なおら のぶお）（1902～1985）は悲劇の考古学者だ。大分県臼杵に生まれ、尋常高等小学校卒業後、正規の学歴がなく、従ってアカデミズムには属さなかったため、学界からは白眼視される存在だった。

1931年、明石の大蔵谷で結核の保養中、西八木海岸で、更新世の人類の（腰の）寛骨の化石を発見した。これが、のちに「明石人骨」と呼ばれ、当時の新聞を賑わしたが、その後、忘れられてしまった。

この化石人骨は数奇な運命をたどっている。発見後、一時的に東大などに貸し出された以外、常時、直良の手元にあったが、直良の上京にともない東京に移り、1945年、空襲で自宅とともに焼失してしまったのだ。これでは、あとから反対意見が出てきても、標本の現物で検証することができない。

それが再び注目を浴びるのは、第2次世界大戦後。標本の精密な複製（石膏模型）が東大に残っていた。1947年、それに気付いた長谷部言人（はせべ ことんど）（1882～1969）により、この骨の主（ぬし）は「明石原人」と命名されて、しばらくの間、ジャワ原人（1891年発見）や北京原人（1929年発見）と同じく、原人のものと考えられてきた。

ちなみに、年代的には、原人→旧人（ネアンデルタール人）→新人（クロマニヨン人）の順に地上に現れたと考えられ、現代人は、この新人の系統に連なる。しかし、その後、新進の研究者たちは、明石人骨は原人ではなく新人のものだ、と言い始めた（1982年）。

それが三たび注目されたのは、1985年、直良が世を去る直前。国立歴史民俗博物館の春成秀爾（はるなり ひでじ）（1942～）が、直良が明石人骨を発見した地点は既に浸食により海没していたので、その近傍の陸地を発掘調査した。しかし、明石人骨と同時代の加工の痕跡が残る木片を発見したにとどまり、原人の同定には至らなかった。

では今、その石膏模型は、どこにあるのだろうか？ オリジナルは東大にある。ただし、再度それから型を取ったレプリカは、明石市立文化博物館にもある。（事務局 津田明彦）

※参考文献 発掘された明石の歴史展「直良信夫と明石」（明石市立文化博物館、2005）

